

- 広島県 -

空襲の弾痕生々しく 今も現役 選奨土木遺産「^つくも橋」

1. はじめに

終戦から76年が経過した。戦争を経験した世代の高齢化が一段と進行し、戦争の記憶が次第に風化しつつある。

そうした中、歴史の生き証人として、当時の空襲の際に受けた激しい銃弾の傷跡を残し、戦争の恐ろしさを今に伝え続ける橋梁が、今もなお現役で人々の暮らしを支えている。



先人の苦勞 トラス部材の様子

2. 生々しい弾痕を残す橋梁「九十九橋」

その橋梁は、広島市の東側に隣接する古くから交通の要衝として栄えた人口約3万人のまち「海田町」に位置し、二級河川瀬野川に架かる一般県道府中海田線の道路橋である。

先代の九十九橋は終戦間もなく広島地方を襲った枕崎台風の洪水で流出した。このため、今の九十九橋は、戦後の物資不足の中、山口県光市にあった旧海軍工廠の鉄骨の廃材を利用して昭和25年に建設された。それから約71年が経過する長寿の橋だ。



今も残る弾痕の様子

この橋梁は、弾痕のほかにも、橋の構造としては関係のないボルト穴が多数空いており、廃材が再利用された当時の様子をうかがい知ることができる。



九十九橋（全景）

橋梁の諸元は、橋長70.0m、全幅4.6mで、形式は、4径間単純鋼下路式ワーレントラスである。

構造の特徴としては、トラスの部材一つ一つが、更に細かなトラスで組み立てられている点だ。組み立てに相当な手間暇がかかる構造だが、昔は鋼材が貴重であったため、鋼材を少しでも節約しようと当時の技術者が努力した産物である。

建設当時、広島県土木部職員として工事を担当した故中本正則氏の証言によると、旧海軍工廠から調達した廃材には二万個の穴や弾痕が残されており、それを必要に応じて塞ぎ、曲がっていた鋼材をハンマーで叩いて直したとのこと。

3. おわりに

九十九橋は、令和3年9月に公益社団法人土木学会の選奨土木遺産に登録された。九十九橋へはJR海田市駅から徒歩5分で行くことができる。また、駅周辺には、西国街道（旧山陽道）の宿駅として江戸時代から発展した多数の歴史遺産があり、これらを巡るガイドツアーもある。

皆さんも、JR海田市駅を起点に、これらの遺産を味わう小旅行に出かけてみてはいかがでしょうか。

参考文献

- ・中国新聞（昭和60年5月11日）
- ・瀬戸内タイムス（平成17年6月1日）

協力

- ・公益社団法人土木学会
- ・海田町織田幹雄スクエア

広島県 西部建設事務所 たかしま かつゆき 高島 克元